いざ、大海に漕ぎいでなん

－教育学部新入生へ－

教育学部長　小笠原　道　雄

今から約二百年前、哲学者のF・W・J・シェリングは、イエナ大学で入学生を前に、「大学における研究の方法に関する講義」（一八〇二年）を行っている。「大学に入って初めて学問の世界に歩み入ろうとしている若者は、全体に対する感覚と衝動を自らが持てばもつほど、（研究を）何も弁別できない混沌や羅針盤をもたない大海のような印象しか持てないものである。この状態の通常の帰結は、何ら核心にまで到達することなしに・・・あらゆる方向へさまよい歩くということである」。

時と所は大きく異なるが、今日の日本の若者とて、いかに大衆化時代の大学生とはいえ、学びの入口に佇み、大きな希望と不安の交錯する中で、同様の感慨にふけるのではなかろうか。

すべてが目的合理的に規定されたレールの上を、ひたすら走り続けてきた新入生の諸君、ここは一度、自分の身体でさまよい歩くことが必要ではないか。

コンパスや導きの星をもたない大海をさまよい歩くことによって、初めて、ある核心に至ることが可能になるのではないか。この核心に至る道程こそ、私達にとって無限の陶冶、教育の端緒なのである。

教育学部玄関

このごろ思うこと

教育学部学生　松　村　美　紀

私は、今、欲しい物がたくさんある。車、パソコン、服…。旅行もしたいし、結婚資金もためなければならない。親孝行のために何か買ってあげたい。これらには全てお金が必要だ。そして、もし私が大学生にならずに働いているか、自宅から大学に通っていれば、実現できたこともあるだろう。

「御入学おめでとうございます」という言葉があるが、入学して三年も過ぎた今になってみれば、本当にそうなのか、と疑ってしまう。確かに、一生懸命、勉強したことが入学によって一時的にでも報われるのだから、素直にその言葉を受け入れた方が良いかもしれない。しかし、その後が大切だ。いくら国立大学だからといっても下宿をすれば、相当なお金が必要だ。大学生活は、自由や楽しいことがたくさんあるが、それだけで終わった時に、何が残っているのだろう。お金で買えない何かが得られたと言えるだろうか。

一日一日を大切に……。